

◆ 日本公認会計士協会

# 北部九州会

<http://n-kyusyu.jicpa.or.jp/>

2012.02

210

号



特別寄稿  
ガダルカナルを訪ねて

平成24年 新春のつどい



平成24年 新春のつどい 日本公認会計士協会 北部九州会

# 戦地ガダルカナルを訪ねて

北九州・筑豊部会

廣瀬 隆明

*takaki hirase*

昨年11月26日から一週間ガダルカナル島とその周辺の島々を訪ねました。目的は二つありました。その一つは一人の日本人として、ガダルカナル島やソロモン海域で無念の死を遂げた先人への慰霊です。もう一つはガダルカナルがいったいどういう島なのかこの目で確かめてみたかったということです。

## (一) ガダルカナルの戦い

ガダルカナル島は、ニューギニアの東方に位置する愛媛県とほぼ同じくらいの大さの島で、現在の人口はおよそ六万人です。昭和17年6月、日本海軍はこの島に飛行場（日本名ルンガ飛行場、アメリカ名はヘンダーソン飛行場）の建設を始

めますが、同年8月にアメリカ軍に奪取され、日本軍が島を撤退する昭和18年2月までの半年間、この飛行場をめぐる、日本軍とアメリカ軍との間で熾烈な戦いが繰り広げられました。日本軍は制空権と制海権を失った結果、武器弾薬、食料等の補給がままならず悲惨な戦いを強いられ、正に飢餓の島となったことは良く知られているところです。この島でおよそ二万人が亡くなり、二千三百人が行方不明となりましたが、戦病死四千三百人という数字に過酷な状況が表れています。また、島の周辺では海軍の戦いも激しく、太平洋戦争のほとんどの海戦はこの時期にソロモン海域で起こっています。そして、優秀な人員を失い、飛行機や軍艦、輸送船などを消耗した

ことがその後の日本の敗戦を決定的にしたと言っても過言ではありません。ガダルカナル島は正に太平洋戦争の主戦場でした。

## (二) 多くの慰霊碑

滞在中、見晴らしの良い丘の上に、太平洋戦争戦没者慰霊協会によって建立された比較的大きな「ソロモン平和慰霊公苑」や、佐賀県武雄市の方が亡くなった父のために個人で建立された慰霊碑など、米軍のものも含めておよそ十数か所の慰霊碑を訪ねました。写真は、ガダルカナルのナナ村というところに全国ソロモン会によって建立された慰霊碑です。車を降りて五分ほど歩いて行きました。慰霊碑の周りの切り開かれた一角以





外はジャングルで、一步その中に入ると進むことも引くこともできないような状況でした。また、碑の後ろにはさび付いた日本軍の戦車も置かれていました。

### (三) 今も残る生々しい戦跡

戦跡も二十か所くらい訪ねましたが、写真はガダルカナル島からポートでおよそ一時間の距離にあるツラギ島で座礁した米軍の揚陸艦です。さび付いて船底は抜けて後ろの半分は海中に没していましたが、島に突入したという感じで残っていました。七十年たった今も当時の姿を留めていることは全く驚きです。

ちなみに、米軍はガダルカナルと同時にこのツラギ島にも上陸し、守備隊およそ六百名が全滅しています。また、ガダルカナルから、小さなプロペラ機で二時間ほどの距離にあるニュージョージア島のムンダに向かい、ここで一泊しましたが、なんと宿泊した海辺のロッジは空港から徒歩一分

でした。ムンダ飛行場は日本海軍が建設しましたが、飛行場というより広場で、周りには柵もなく、片隅に木造平屋の小屋（これがエアターミナル）が建っているだけです。

ムンダからポートで一時間半ほど行くと、日本海軍が占領していたコロンバンガラ島があり、ここでは病院跡地などを回りました。ポートを岸につけて（栈橋などはありませんので、岸の近くの浅瀬で海にジャンプです）上陸すると、集落の大人、子ども達が案内してくれました。時間をもてあましているのか、大人二人、子ども四人が付いてきて、これにガイドとポートの運転手に私という一団で、山道を十分ほど歩いたところに病院跡地がありました。跡地といっても、倉庫として使用していたのでしょうか、直径一メートルくらいの横穴があり、中は真っ暗です。入り口付近は水がたまっていましたので靴を脱いで、ガイドと一緒にライトの明りをたよりにおそろおそろの中に入ると、五メートルほど進んだところに十本くらいの未使用の薬品瓶が整然と置かれており、その右隣を見ると、かなり大きな機銃弾が二十発くらい積みま

ていました。

横穴はさらに奥へと続いていましたが、何しろ真っ暗闇ですので、それ以上進むことは断念しました。

家族など愛する人々と別れ、日本から遠く離れた南の島で戦った人々の気持ちはいかばかりであったでしょうか。

### (四) おわりに

今回の訪問では、現地での行程は違いましたが行き帰りの飛行機やホテルは、「日本遺族会」が主催した友好親善事業の、およそ二十名の遺族の方々と一緒にした。

帰りの空港（旧ヘンダーソン飛行場）では、小さな飛行場ですので待合室から飛行機までは屋外を徒歩で移動しました。その折、遺族の一人が、激戦地のムカデ高地やその背後にそびえるアウステン山の方角に向かって一礼してタラップを上がいけましたが、その姿に大変感銘を受けました。

私も、太平洋戦争で犠牲になられた方々のご冥福を祈り、戦争のない平和な時代に生まれ育ったことに感謝しつつ帰路に着きました。